

Q：今の教育（学校）は、少人数で先生の目が届くので安心だ。子供と先生のコミュニケーションもとやすく、子供同士も仲良くなりやすいと思う。そういった良さが失われるのではないか。

A：右京小学校も神功小学校も1学年30人前後の少人数で、きめ細かでアットホームな教育を進めています。統合すると1学年が60名前後の学校となりますが、クラスが1学年2学級となることから1学級の規模は今とあまり変わりません。現在のように、きめ細かにアットホームな関係の中での教育を継続します。1学年2学級となることで毎年のクラス替えが可能となり、より多くの友達の中で多様な個性に出会い、経験を積むことができます。また、学年に複数教員がいることは、子供の見守りや支援がより手厚くできることもメリットです。

Q：施設一体型小中一貫校になると、9年間同じ場所で同じメンバーの生活になる。それは子供にとって良くないと思う。

A：確かに9年間変わらない人間関係の中での学校生活には課題があります。それは人間関係を築いていく力（コミュニケーション力）の育成です。しかし、施設一体型小中一貫校だからこそできる課題克服に向けた取組があります。例えば日常的な学校生活の中での小中交流です。異年齢・異校種間の関わりの中で小学校1年生から人間関係を築いていく力を磨いていきます。

Q：中学校での段差は必要。中1ギャップがなくなっても高1ギャップが心配だ。

A：子供たちは「壁」を乗り越えて成長します。それは施設一体型小中一貫校でも同じです。施設一体型小中一貫校は「壁がない」のではなく、中学1年で出合う壁を少し小学校に分散したりして、どの子も自分の力で乗り越えるように工夫しています。9年間の学校生活の中で高1ギャップにも負けない力をつけていきます。

Q：小学校の学校規模も課題だが、むしろ中学校の学校規模が心配だ。

A：現在平城西中学校は1学年が2学級規模の学校となり、教員数や部活動の活性化などに課題がでてきました。この課題は小学校の統合再編によって解消されることはありませんが、施設一体型小中一貫校となることで中学校教員が1名配置されたり小学生が中学校の部活動に参加することができるようになったりと、課題解消に向けた一歩を踏み出すことができます。また、小学校教員が中学生に関わることができるようになるため、中学校教育の活性化に向けた取組も可能になります。

Q：施設一体型小中一貫校は、連携型の小学校・中学校とどこが違うのか？

A：中学校教員が小学校の英語や音楽、図画工作といった教科を教えたり小学校教員が部活動の顧問をしたりといった「目に見える違い」もありますが、「一つの学び舎に小中学校の教員がいて、その教員全員で小学校1年生から中学校3年生までの教育を日常的に行っている」というところが一番大きな違いです。

小学校教員は小学校卒業後の子供たちの様子を目の当たりにすることで「自分の受け持つ学年ではどのような力をつけなければならないのか」が分かってきます。中学校教員は中学校入学前の子供の様子を知ることで、学習面も生活面も一人一人に応じた指導・支援をすることができるようになります。また、小学生は中学生を見ることで将来の自分の姿をイメージでき、中学生は小学生の姿から自分の成長を実感できます。